住井すゑとその文学の里（五十二）

ー牛久沼のほとりー

牛久市文化財保護審議委員　栗原（くりはら）　功（いさお）

住井の長編児童小説『夜あけ朝あけ』ー舞台は純農村で結城紬の里ー

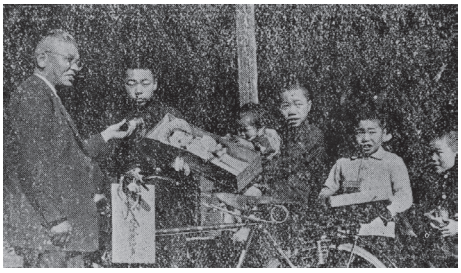
住井すゑは、夫犬田卯の病が小康状態を得た昭和28年（1953年）の夏。夫が言うように、「本当に農村に生き、農民それ自身の立場に立って現代社会を描いてみよう」、そうすれば、「その作品こそ夫の求める農民文学だ」と、住井は納得した。これを住井はモチーフにして、「戦後農政の矛盾を追及し、村の権力者の自己中心を糾弾し、さらに農村に未来を求める少年を描き出して、農民の連帯を歌い上げる」、『夜あけ朝あけ』という小説を構想した。『夜あけ朝あけ』は、住井の代表作の一つに数えられているので、次にそのストーリーを記しておくことにする。

『夜あけ朝あけ』の舞台は、茨城県の結城（ゆうき）郡下に設定された。設定地は鬼怒川（きぬがわ）（古代には衣川・絹川とも呼ばれた）の右岸の辺に広がる純農村で、そこは結城紬（※1）の里でもあった。登場する奥山家は、父が戦死し、母と4人の子に祖母。4人の子は、上から正司（中学3年）、武（中学2年）、みどり（小学6年）、えつ子（6歳）。奥山家では、一家総出による農業と母の結城紬織りでどうにか生活している。しかし、田植え作業で母が破傷風を患い、あっという間に急死してしまう。残された4人の子と年老いた祖母は、田、畑を耕して懸命に生活を守る。そんな中で、割り当てられた16俵の供出米（※2）を全県一で完納したため、正司が知事から表彰を受ける。だが、それは何も奥山家が16俵を早々と供出できるほど余裕があったわけでもないし、正司が国に協力的だったからでもない。正司の家は、畑が2反8畝、水田が3反8畝、労働力は子どもだけ。割り当てられた16俵の供出米は、まったく納得しがたい量である。割り当ての規準になっている国の供出制度にも反対だし、無理を承知で押し付ける集落の地主の長老たちにも大いに不満であった。正司が早々と供出したのは、刈り入れた今、供出しておかないと自分たちの飯米になってしまい、後からではとても16俵を納めることはできないと考えたからにほかならない。完納県下一と善行扱いされるのは、彼にとって有り難迷惑な話であった。正司の家では、経済的にどう計算してみても、死んだ母が稼ぎ出していた機織りの分が不足であった。中学校を卒業すると正司は、弟と妹に家を任せ、東京に出稼ぎに行く。供出米を奨励するための知事表彰で、褒美に自転車までもらった村自慢の模範少年が、農業を捨てて都会に走る。やっかみも含め、正司を非難したり、事実無根のうわさをする者もいるくらいであった。そんな折、夏祭りに小学校の校庭で映写会が開催される。そのニュース映画で、都会の夜間工事現場が放映され、真っ黒になって働いている正司の姿が映し出された。正司は、都会の夜に自分たちと同じように働いている。村人たちは思わず画面の正司に声援を送る。

住井の夫犬田卯は、農業県茨城の中で、生産農民の立場に立って、農民文学に携わったが、一方でフランスの田園作家シャルル・ルイ・フィリップにも深く傾倒していた。そこで住井は『夜あけ朝あけ』の「あとがき」にフランスの田園画家ミレーの『生涯をかけて百姓の絵をかくであろう』という言葉を引いて、働く人以上に美しい人はいないと記し、夫犬田卯の期待に応えようとした。

※1　結城紬…昭和28年茨城県無形文化財に、昭和31年国重要無形文化財にそれぞれ指定されている。結城紬は古代の第10代崇神天皇統治下（3世紀前半）に結城地方（結城市を中心に本県と栃木県にまたがる鬼怒川沿いに20㎞以内）でおこった丈夫で高級な絹織物。農家の副業として連綿と織り伝えられている。

※2　供出…食糧管理法に基づく制度。昭和17年（1942年）から同29年（1954年）にかけて、つまり戦中・戦後の食糧不足時代に農民から米麦など主要食糧の一定量を、政府が決めた価格で強制的に買い上げた方式。消費者に一定の主食配給料を確保することを目的としていた。



⬆供出一番乗りの少年を報奨する初の民選による茨城県知事友末洋治（昭和22年4月より昭和34年4月まで在職）。ただし、この少年は『夜あけ朝あけ』の主人公とはまったく関係ない。

➡供出風景

ー写真2点とも昭和54年茨城県議会発行『郷土百年ー茨城県議会100年写真集』より転載ー